

催眠性挿話「食蓮人たち」

——『ユリシーズ』第5挿話論——

桑 原 俊 明

Language of flowers. They like it because no-one can hear. (U 5. 261-62)

花言葉。誰にも聞こえない言葉だから愛用されるんだ。

I. 放浪の始まり

時刻は午前10時頃、場所はリフィー河口南岸沿いの埠頭。ブルームの実質的な一日のダブリン放浪の旅は、この時間、この地点から始まる。第4挿話「カリュプソー」の終結部において、エクルズ・ストリート7番地の家の屋外便所から朝の大便を済ませて出てきたブルームはジョージ教会の鐘の音を聞く。時刻は午前8時45分。そして、第5挿話「食蓮人たち」の冒頭に、1時間余の空白時間を経てサー・ジョン・ロジャソン埠頭を一人ぶらつくブルームが再び現れる。この挿話での彼の寄航地は、郵便局に始まり、教会、薬局と続き、公衆浴場にて約1時間の旅を終える。この放浪の旅路でブルームはダブリン市中を徘徊する二人の人間と遭遇する。一人はC・P・マッコイ、もう一人はバンタム・ライアンズ。二人はそれぞれ『ダブリン市民』の「恩寵」と「蔦の日の委員会室」の登場人物であるが、ここで再び『ユリシーズ』の小説世界に登場している。

ブルームが寄航する各停泊地は、いわゆる原作『オデュッセイア』の「蓮の実喰い（ロートパゴス人）の国」に相応するのだが、全24書1万2000行余の原文のうちその部分の叙述はわずか20行余りにすぎない。（『オデュッセイア』第9書82-104行。『ユリシーズ』における「食蓮人たち」の挿話は、全18挿話2万5500行余中572行で短い方から数えて第4番目に位置する。）オデュッセウス率いる帰還船の乗組員は

蓮の実喰いの国に上陸して、蓮の実喰いの族に「蜜みたように甘い果実」（“the honey-sweet lotus fruit”）⁽¹⁾を饗応されると、船に戻ることにも祖国に帰ることも忘れてしまう。同じように、ブルームが各停泊地で饗応される事物、具体的に言うならば、郵便局で受け取るマーサからの手紙、教会で執り行なわれているミサ、薬局で購入する石鹼、公衆浴場で満喫する風呂（ただし、現実ではなく空想）、これらはすべて何らかの形で現世の苦悩を忘れさせてくれる。

ブルームの現世の苦悩の直接の原因は、前挿話「カリュプソー」にて言及されている、「大胆な筆蹟」（“Bold hand”）で「ミセス・メアリアン・ブルーム」（“Mrs Marion Bloom”）（U 4. 244）と書かれているボイランからの手紙にあることは言うまでもない。既婚女性に対する宛名としては「ミセス・レオポルド・ブルーム」が正しいとされていた。だから、ブルームはその大胆な宛名が示唆する罪の甘い匂いを嗅ぎつけ、動揺する。その肉太の「大胆な筆蹟」の視覚的残像は、彼の意識から離れず、第13挿話「ナウシカア」において描かれるオナニズムの瞬間に再び甦る（U 13. 843）。

『オデュッセイア』で言及される「蓮（lotus）」は、その実を食べると夢ごちちとなり、浮世の苦しみを忘れて、安逸をむさぼるという、想像上の植物と考えられている。花の一種である「蓮」とは異なる、この伝説上の「ロートス」の実が具体的にどのような植物を指していたのかについては諸説あり、一説には棗椰子（なつめやし）の実ないしは棗（なつめ）の実を指すとか、また一説には一種の林檎を指すとか、さらには罌粟（けし）であろうなどという説がある。

ホメーロス作『オデュッセイア』に関する情

報源のひとつとして、ジョイスはヴィクトル・ベラルの『フェニキア人とオデュッセイア』(*Les Phéniciens et l'Odyssée* (Paris, 1902-03)) を典拠としていたことが判明しているが、フィリップ・F・ヘリングは、彼の「食蓮人たち」論においてベラルの研究書を引合いに出して、古代ギリシアの学者はロートをナツメヤシないしはナツメとみなしていた、と述べている。また、ホメーロスは「ロートス」(“lotus”)と「レーテー」(“Lethe”)の2語をもじり、混成した、ということを紹介している。この混成の結果、「ロートス」は「忘却の果実」(“fruit of forgetfulness”)という含意を帯びる。⁽²⁾

このベラルの説から容易に思いつくことは、第5挿話のタイトル“Lotus-Eaters”における“Lotus”は、黄泉の国にあってその水を飲むと一切の過去を忘れてしまうとされる“Lethe”(「忘却の川」)と反響・共鳴して次挿話“Hades”を予示しているかのようだ、ということである。この思いつきを支えるかのような面白い符号が「食蓮人たち」のテキストに認められる。それは、「忘却の河」(“waters of oblivion”)(U 5. 365)という語句である。

1921年10月7日付の手紙に「〈ハーデス〉と〈食蓮人たち〉は大幅に拡充された」⁽³⁾とあるように、『ユリシーズ』(1922年)出版前の両挿話の最終的な加筆・推敲はほぼ同時期に行われたようだ。校正のたびに、ジョイスが語句の追加・置換・修正を頻繁に行ったことは有名な話だが、「忘却の河」という語句が終期の校正段階で書き加えられた事実はこの符号のもつ意味合いを増幅させている。ジョイスが「忘却の河」という語句を書き加えたとき、彼の心中に「ハーデス」の心象風景が去来していたであろうことは、想像に難くない。「忘却の河」加筆の意図は、第5挿話の「忘却」というモチーフの補強と、次の第6挿話の予告にあると言えるだろう。「忘却の河」は謎の暗号である。しかし、これは、ジョイスがテキストに嵌め込んだ数多くの謎と判じ物の中でも、比較的容易に解き明かすことのできる謎であり、判じ物である。

『オデュッセイア』ではロートパゴス人の国寄

航に続いて、「キュクロプス」探訪(第9書105行以下)が来ている。しかし、ダブリンのオデュッセウス、レオポルド・ブルームは、キュクロプス(一つ目の巨人)の住む国ではなく、忘却の川のある「ハーデス」へ向かってその放浪の旅を続ける。

II. アヘン吸飲者たち

“To eat lotus”という表現には、“to forget”あるいは“to be unmindful”という隠喩的意味があるらしいが、この場合、「豆ぐらいの大きさの、種のないサフラン色の果物で、群生し、おいしくて健康にもいい」⁽⁴⁾ ロートスは、現実逃避願望、責任回避願望を満たしてくれる忘却の果実を象徴している。ブルームにとって、ロートスはマーサの手紙であり、公衆浴場の湯槽なのである。そして、教会に集う人々にとってのロートスは聖体なのである。マーサの秘密の手紙を材木置場の物陰でこっそり読んだあと、教会の裏口にやって来たブルームはドアに貼られた掲示に目が留まる。

Same notice on the door. Sermon by the very reverend John Conmee S.J. on saint Peter Claver S. J. and the African Mission... Save China's millions. Wonder how they explain it to the heathen Chinees. Prefer an ounce of opium. Celestials. Rank heresy for them. Buddha their god lying on his side in the museum. Taking it easy with hand under his cheek. Josssticks burning. Not like Ecce Homo. Crown of thorns and cross. Clever idea Saint Patrick the shamrock. (U 5. 322-23, 326-30)

ドアには同じ掲示が貼ってある。イエズス会ジョン・コンミー神父の説教、ピーター・クレイヴァーとアフリカ伝道について。……支那の百万大衆を救済する。異教徒の支那人にいったいどうやって説明するんだらうな。阿片一オンスのほうがいいと言うだらうに。至福の民中国人。彼らにとっては穢らわしい異端邪説だ。彼らの神ブッダは博物館で寝そべっている。ゆったりと頬杖をついて。線香が燃えて。荆冠のキリスト像とはえらい違いだ。荆棘の冠と十字架。シャムロックで三位一体を象徴するなんて、聖パトリックはうまいことを思いついたもんだ。

異教徒の中国人はキリスト教よりアヘンの方
ずっと好きに違いないから、彼らを改宗させよ
うとするのは到底無理な話だ、とブルームは考
える。そして、ブルームは博物館に陳列されて
いる、中国人の神さま、仏陀の横臥像を心中に
思い描く。線香の煙に包まれながら、ゆったり、
泰然自若として横臥する仏陀像は、荊棘の冠を
かぶり、十字架に磔^{はりつけ}にされているキリスト像と
は大違いである。中国人がキリスト教より魅せ
られるアヘンは浮世の苦しみを忘れさせてくれ
る麻薬である。

19世紀中葉、貿易の利害関係にからんでイギ
リスと中国（清）の間にアヘン戦争が起こった。
この「アヘン戦争」という歴史上の呼称が象徴
しているように、当時の中国にあっては、アヘ
ン吸飲の悪習が国中に蔓延していた。中国政府
はイギリスがインドから大量に仕入れたアヘン
の国内持ち込みを防止しようとしたが、イギリ
ス側は自国内で大量消費されるようになった中
国茶（紅茶）を輸入するためにも、アヘンの積
極的売り込みを図った。そこに、両国の国益上
の利害問題が生じて、戦争勃発の発端となった
のである。中国側の全面敗北で終結した戦争後、
19世紀末に至ると、中国の至る所でアヘンケシ
の栽培が行われるようになっていたと伝えられ
ている。アヘンを吸飲する風習が一般に知られ
るようになったのは中国（台湾）からで、中国
人アヘン吸飲者を描いた絵画は19世紀のヨー
ロッパに流布し、アヘンへの魅惑を醸成した。

本来、アヘンはアヘンケシの実からにじみ出
た果汁を乾燥して作る薬物で、鎮静剤、鎮咳剤
として用いられた。しかし、一方で、アヘンは
苦痛を和らげ、精神的苦悩を鎮める忘却の薬で
もあり、幻覚、妄想、陶酔感をもたらす麻薬で
もあった。⁽⁵⁾

前挿話「カリュプソー」に認められる東方へ
の憧憬の念は、「食蓮人たち」全体を通じて、ブ
ルームの意識を支配し続けている。そして、ブ
ルームの意識は絶えず現実を回避し、逸楽の幻
想世界に没入しようとしている。中国人とアヘ
ンという組み合わせの連想は第6挿話「ハーデ
ス」のディグナム埋葬の場面で、再びブルーム

の意識に浮かんでくる。「ギャンブル小佐はマウ
ント・ジェローム墓地を自分の庭だなんて言っ
ている。たしかにそうだ。眠りの花を植えるべ
きだな。中国の墓地の罌粟^{けし}の花から最上等の阿
片がとれるとマスティアンスキーが教えてくれ
た。」（“His garden Major Gamble calls Mount
Jerome. Well, so it is. Ought to be flowers
of sleep. Chinese cemeteries with giant
poppies growing produce the best opium
Mastiansky told me.”）（U 6. 768-70）眠りの
花—ケシの花—墓地という連想の背景には、花
言葉とギリシア神話がある。ケシの花（ただし、
白いケシの花）の花言葉は「眠り」。そして、「眠
り」の神の住まう洞窟の奥からレーテー「忘却」
の川が流れ出ていて、その洞窟の入口近くにケ
シの花が咲き乱れている（オウィディウス『変
身物語』巻11, 605行）。〈レーテー—ケシーアヘ
ン—中国人〉はブルームの意識下でひとつの連
鎖を形成している。

ケシの花の花言葉は色によって異なり、白の
場合「眠り」で、赤の場合「慰め」、深紅色の場
合「妄想」となる。そして、ケシは倦怠、嗜眠^{エンブレム}
の表象でもある。また、眠りと忘却をもたらす
慰藉を表す。第18挿話「ペネロペイア」におけ
るモリーの性的妄想と呼べるような半覚醒意識
の一部から、ブルームがモリーの誕生日にケシ
の花を8つ届けさせたことが分る（U 18. 329-
30）。ブルームがケシの花に何らかの意味をこめ
ていたとするならば、一体それは何だったのだ
ろうか。

アヘンはケシから作り、ケシはあの世の忘却
の川のほとりに生えていて、中国人はアヘンが
大好きだ。そして、ブルームはモリーの9月8日
の誕生日にケシの花を8つ届けさせた。ケシか
ら作られるアヘンは幻覚、妄想をもたらす。眠
りと忘却をもたらす。ブルームはモリーとボー
ランの密会の場になるかもしれない自分の家に
帰りたくない。その密会の結果、自分が寝取ら
れ亭主となるやもしれない、その耐えがたい現
実を直視したくない。だから、彼は一時的にせ
よ現実を忘却し、白日夢の世界に浸り切ること
ができるなら、と願っている。忘却と白日夢を

もたらししてくれるものは何だろうか。もしそのようなものがあるなら、それは現実逃避願望を満たしてくれるだろう。

ブルームがオール・ハロウズ教会で観察する聖体拝領の様子は、移動カメラに映し出される画面とブルームの意識が一体となったかのような文体で描かれている。

The priest went along by them [women], murmuring, holding the thing in his hands. He stopped at each, took out a communion, shook a drop or two (are they in water?) off it and put it neatly into her mouth. Her hat and head sank. Then the next one. Her hat sank at once. Then the next one: a small old woman. The priest bent down to put it into her mouth, murmuring all the time. Latin. The next one. Shut your eyes and open your mouth. What? *Corpus*: body. Corpse. Good idea the Latin. Stupefies them first. Hospice for the dying. They don't seem to chew it: only swallow it down. Rum idea: eating bits of a corpse. Why the cannibals cotton to it. (U 5. 344-52)

司祭が彼女たちのあいだを、つぶやきながら、例のものを両手にもって歩いて行った。一人ひとりの前で立ちどまって、聖体のパンを一つ取り出し、一しずくか二しずく水を切って（水にひたされているのか？）手ぎわよく女の口に入れてやる。女の帽子と頭とが下がる。それから、次の女。女の帽子がすぐ下がる。そして次の女、小柄なお婆さんだ。司祭はかがみこんで彼女の口に入れてやりながら、絶えずつぶやいている。ラテン語。その次の女。目をつぶってあーんと口をあけてください。何だっけ？ コルプス。肉体。死体。ラテン語というのはうまい手だな。まず女たちを麻痺させてしまう。死んでゆく人々のための施設。彼女たちは噛まないらしいな、そのまま吞込んでしまう。変な思いつきだよ。肉体のかけらを食べる。だから人喰い人種たちに受けがいいんだ。

教会のロートスは聖体である。そして、聖体拝領者たちは教会のロートパゴス人である。ミサ聖祭に参集し、聖体を授けられる人々は、アヘンを吸飲する中国人のように、至福のひとときを味わう。「女たちを見ろ。たしかに聖体のせいで彼女たちは幸福な気持ちになっている。」

(“Look at them. Now I bet it makes them feel happy.”) (U 5. 359) 聖体拝領者たちもまた「至福の民」なのである。

聖体はキリストの血と肉を表すブドウ酒とパン。最後の晩餐でキリストは12弟子に向かって言われた。「これは、わたしの体である」（ルカ伝、22: 19）。ラテン語で“*Hoc est enim corpus meum*.”ブルームの連想は、司祭がささやくラテン語から、聖体のパン、パンは元々キリストの肉、肉体はラテン語で“*corpus*”，英語だと“*body*”，死体は“*corpse*”という具合に続いている。

「食蓮人たち」を論ずる場合、批評家たちは概ねこの挿話で宗教はアヘンと同一視されている、ということ指摘する。例えば、マリリン・フレンチは「この章において宗教は人々のアヘンとみなされている」⁽⁶⁾と端的に述べている。宗教はアヘンであるとマルクスが言ったかどうか、その真偽のほどは分らない。もし、それが事実であったとするなら、マルクスは社会主義にとって宗教は危険なものである、宗教は社会主義発展の障害となる危険性をはらんでいる、ということと言おうとしていたのではあるまいか。

しかし、「食蓮人たち」において、宗教はアヘンであると言う場合、それは、否定的意味で宗教を危険物とみなすことを意味しない。たしかに、アイルランドの麻痺の一形態として、アヘンは宗教の隠喩となりうるのであるが、それは人々に苦しい現実を忘れさせ、束の間の幸福感をもたらすロートスの隠喩でもあるのだ。宗教はアヘンであり、ロートスである。そして、アヘンは聖体の隠喩となる。なぜなら、聖体はアヘンのように「あらゆる苦しみをいやす」(“Lulls all pain.”) (U 5. 367-38) からである。

ジョイスは「恩寵」において、「彼女[ミセス・カーナン]にとって、宗教とはひとつの習慣であった」(“Religion for her was a habit……”) (D p. 171) と書いた。「食蓮人たち」で描かれる女たちは習慣で教会にやって来て、聖体を口にする。正確に言うなら、聖体のパンを歯で噛むことなく、口蓋でつぶして飲み込む。彼女たち

は宗教という習慣に容易に屈し、聖体というアヘンにより一時的に現世の苦悩を忘れ、幸福感に浸る。ブルームは一時的によせ聖体によって忘却と幸福感の恩恵に与る聖体拝領者たちに少なからぬ関心を抱く。いや、それは関心以上の感情であって、深層意識において、彼は自らもその恩恵に与りたいと願っている。彼は心の痛みを和らげてくれる何かを求めている。それは聖体かもしれない。アヘンかもしれない。あるいは、ロートスかもしれない。しかし、放浪するハンガリー系ユダヤ人の口に聖体は授けられなかった。ブルームはマーサの手紙が喚起する空想恋愛に慰藉を見出そうとする。

III. 語り得ぬものに向かって

「食蓮人たち」を論ずる場合の大きな問題点は2つほどあると考えられる。ひとつは、ロートスが象徴する「忘却」と「安逸」というモチーフがブルームの内面意識とどう関係があるのか、そして、そのモチーフが具体的にどういう形でテキスト内に織り込まれているのか、という問題点。もうひとつは、ジョイスが「食蓮人たち」の推敲段階で書き加えた名種の花の名称とそれらの花言葉のもつ意味は何か、そして、その加筆自体の意図はどこにあるのか、という問題点である。

原『オデュッセイア』との照応関係において、「忘却」と「安逸」のモチーフは、ブルームの現実逃避願望、白日夢世界希求と相俟って、「食蓮人たち」のテキストの随所にさりげなくちりばめられている。マーサの手紙と聖体拝領の外に、「極東」(“The far east”)の「地上の楽園」(“the garden of the world”) (U 5. 29-30) セイロン、「馬たちの黄金郷」(“Their [Horses’] Eldorado”) (U 5. 215), 「クリケット日和」(“Cricket weather”) (U 5. 558) などが忘却と安逸を象徴している。挿話の最初と終り近くのテキストの2箇所に何気なく織り込まれている“Lethargy” (U 5. 34, 474) (「嗜眠」, 「昏睡状態」, 「無気力状態」) という語が最も明瞭にこの挿話のテーマを表している。“Lethargy”の語頭“leth”の語源は“Lethe”と全く同じギリシア

語で“forgetfulness”「忘却」を意味し、同様にギリシア語起源の“argy”は“idle”「無為」を意味する。

“Lethargy”という語が挿話の最初と最後に配置されていることから分るように、「食蓮人たち」のテキスト全体はけだるい雰囲気と物憂い気分にも包まれている。そして、そのテキストはキャラクターの内面心理を反映している。ジョイスが紡ぎ出す催眠的テキストはブルームのけだるく、物憂い心境・意識と表裏一体、不即不離の関係をなしている。

「嗜眠」と同じように、この挿話のもうひとつの大きなライトモチーフである「花」は、テキストの最初と最後に、正確には、冒頭パラグラフ内と最終パラグラフの結語に、ある意図をもって織り込まれている。冒頭のパラグラフで、葉巻の吸殻を吹かしている少年を見てブルームは思う。「煙草を吸うと大きくなれないと言ってやるか。まあ、ほっとけ! 薔薇の花に囲まれた人生でもないんだ。」(“Tell him if he smokes he won’t grow. O let him! His life isn’t such a bed of roses.”) (U 5. 7-8)

この引用部分は校正過程におけるジョイスの加筆である。冒頭パラグラフにおけるこの加筆の意図は、この挿話の主題が「花」にあることを読者に予感させると同時に「花」の主題を再強化することにある、と言えるだろう。

2つのパラグラフからなる終結部分で、ブルームはトルコ式公衆浴場の湯槽につかって、快適な湯加減を楽しんでいる自分の身体を想像する。

Enjoy a bath now : clean trough of water, cool enamel, the gentle tepid stream. This is my body.

He foresaw his pale body reclined in it at full, naked, in a womb of warmth, oiled by scented melting soap, softly laved. He saw his trunk and limbs riprippled over and sustained, buoyed lightly upward, lemonyellow : his navel, bud of flesh : and saw the dark tangled curls of his bush floating, floating hair of the stream around the limp father of thousands, a languid floating flower. (U 5. 565-72)

さて入浴を楽しもう。きれいな水槽、さわやかなエナメル、おだやかな微温の流れ。これがおれの体。

想像のなかで彼の白い体がのびのびと浴槽に横たわった。裸で、ぬくもりの子宮のなかで、溶けてゆく滑らかなシャボンの香りに包まれ、静かな波に揺られ。彼の胴体と手足はさざ波に愛撫され抱かれ、かるやかに浮かんで、レモンの黄色。彼の臍、肉の蕾。そして彼の漂う黒くもつれあう縮れた茂みが、幾千人の子らのしぼんだ父親のまわりにふわふわと流れ漂う毛が、見えた。ものうげに漂う一輪の花。

「これがおれの体」(“This is my body.”)はあとから加筆された一文だが、これは最後の晩餐における12弟子に対するイエスの御言の完全なパロディで、聖体のモチーフを補強している。

『ユリシーズ』のテキストが内包する幾重もの照応関係、象徴性を解き明かす一種の要約・鍵として、ジョイスは2種類の計画表を知人に渡した。それぞれ、リナティ計画表(1920年)、ゴーマン＝ギルバート計画表(1921年)と称されている。後者の計画表によると、「食蓮人たち」の「象徴」は「聖体」,「器官」は「生殖器」,「技法」は「ナルシシズム」となっている。

上記の引用文で、ブルームの生殖器、男根は花にたとえられている。ブルームは浴槽という「ぬくもりの子宮」の中にたゆたう「花」をみつめてナルシシズムに耽る。「ぬくもりの子宮のなかで」(“in a womb of warmth”)という語句は、「これがおれの体」と同様、推敲段階で書き加えられた部分である。終末部におけるこれらの加筆の意図は、「彼の臍、肉の蕾」(“his navel, bud of flesh”)と「幾千人の子らのしぼんだ父親」(“the limp father of thousands”)という加筆語句を含めて、挿話のもつ象徴性・暗示性を深め、パロディ感覚を増強し、文体を「花やか」にすることにあったと言える。

ブルームは「ヘンリー・フラワー」という偽名でマーサ・クリフォードと秘密の文通をしている。彼女との文通のきっかけは、ブルームが「アイリッシュ・タイムズ」紙に出した求人広告。「求む、教養ある女性タイピスト、文筆にいそしむ紳士の助手」(“Wanted, smart lady typist to

aid gentleman in literary work.”) (U 8. 326-27) ブルームが当日ウェストランド・ロー郵便局で受け取った手紙は4通目の手紙。「タイプで打った四通目の手紙一通、受取人ヘンリー・フラワー(H.F.はL.B.のこと)、受信人マーサ・クリフォード(M.C.は何者か?)」(“A 4th type-written letter received by Henry Flower (let H.F. be L.B.) from Martha Clifford (find M.C.).”) (U 17. 1841-42)

マーサ・クリフォードとは何者か? リチャード・エルマンはマーサの部分的モデルとしてスイス人マルテ・フライシュマン(Marthe Fleischmann)を挙げている。⁽⁷⁾1918年12月上旬のある日、ジョイスはチューリッヒ市内のアパートの窓から隣のビルの女性がトイレのチェーンを引くのを見た。3日と経たないうちに、帰宅途次にあったジョイスはそのときの女性と偶然出会い、彼女の顔を見て、驚愕した。その若い女性は、20年前のアイリッシュ海の浜辺で目撃した、スカートをたくしあげている少女を彷彿させた。その少女は、『若き日の芸術家の肖像』第4章の終りに描かれている、浜辺に一人たたずむ、美しい海鳥のような少女の原型であった。彼女の神聖なイメージに啓示を受けて、ステイーヴンは心の中で叫ぶ。「生き、過ちを犯し、墮ち、勝利を得、生から生を創造しなおそう!」(“To live, to err, to fall, to triumph, to recreate life out of life!”) (P p. 434)

偶然の出会いのあとすぐにジョイスは彼女に熱烈な手紙をフランス語で書いて、送った。仕事をもたず、ロマンチックな小説を読むなどして日々を過ごしていた彼女との文通が始まった。その後、2ヶ月と経たない翌年の聖燭節(Candlemass)に当たる2月2日の37歳の誕生日に、ジョイスはマルテを友人フランク・バジェンのアトリエに招く計画を立てた。そのとき、ジョイスには2人の子供を産んだノラがいたし、マルテには彼女が「後見人」と呼んでいたところの愛人ルドルフ・ヒルトポルドがいた。バジェンが二人の密会に加担するのをためらうような素振りを見せると、ジョイスはすかさず、厳しい口調で応答した。「もし、この件に僕自身何

らかの自制を許すようなことがあるなら、それは僕にとって精神的な死となるだろう」⁽⁸⁾と。ジョイスの計画通り、二人は会い、バジェンを交えて会話を楽しんだ。そのあと、ジョイスは彼女を家まで送った。その夜遅くバジェンと再び会ったジョイスは「彼女の体の最も冷たい、最も熱い部分を探ってきた」⁽⁹⁾と告白した。しかし、それは性的交渉を意味するのではなく、ただ単に抱擁を意味していたようだ。

二人のプラトニックな恋愛関係は6カ月後あっけない幕切れを迎える。二人の秘密の交際は、ヒルトポルドの知るところとなり、ジョイスは彼から脅迫の手紙を受け取る。その事情を説明した、1919年6月19日付バジェン宛の私信によると、マルテは精神を病み、一時精神病院にいたことや、自殺の恐れがあったことなどが分る。⁽¹⁰⁾二人のロマンチックな交際に終止符を打つかのように、その私信の終りの方に、ジョイスは何の未練もみせず、むしろ、さらりと、おどけたように、「結果は静止、停戦」と書いた。

ブルームの秘密の文通相手マーサの原型の一部を形成していたとされるマルテとジョイスの間には、かくの如きドラマがあった。しかし、ここで疑問に思うことは、二人の出会いと別れは1918年12月から翌年6月にかけての半年間の恋愛劇であったという事実と、第5挿話「食蓮人たち」の『リトル・レビュー』誌発表掲載が1918年7月であったという事実の双方から相生ずる矛盾点である。雑誌発表が7月であるからには、脱稿はもう少し早い時期であっただろう。エルマンは「食蓮人たち」の雑誌発表用原稿完成時期を「1918年4月(?)」としている。⁽¹¹⁾つまり、「食蓮人たち」の執筆・脱稿と雑誌発表の時点で、ジョイスはまだマルテと出会っていなかったのである。ましてや、まだ彼女との文通さえ始まっていなかった。

マルテはマーサの部分的モデルであっただけでなく、「ナウシカア」における、足の少し不自由な、空想的な少女ガーティ・マクダウエルのも原型でもあったと考えられている。「ナウシカア」の脱稿は1920年2月か3月で、雑誌発表は同年4月から8月にかけて。⁽¹²⁾この場合、時間

的経緯から考えて、マルテとの恋愛ドラマが多分にジョイスのガーティ創造の源泉になっていたであろうことは無理なく推察できる。ところが、「食蓮人たち」の場合、時間的に脱稿と雑誌発表がマルテとの文通・交際よりあとにきている以上、マルテがジョイスのマーサ創造の源泉の一部になっていたと考えることには無理がないだろうか。

マルテとの文通に関する直接資料として1918年12月にジョイスがマルテ宛に書いた4通の手紙を読むことができる。当面の議論の展開に関連すると思われる部分を数ヶ所、原文はフランス語だが英語訳で、引用してみたい。

- (a) "*Then you are not annoyed .*"
- (b) "*But why do you not want to write even one word to me—your name?*"
- (c) "*I look into your eyes, and my eyes tell you that I am a poor seeker in this world, that I understand nothing of my destiny, nor of the destinies of others, that I have lived and sinned and created. . . .*"
- (d) "*Put it [envelope] in the letter-box and write just one word in it. Are you angry?*"⁽¹³⁾
[Italics mine]

- (a) 「ではあなたは怒っていませんね。」
- (b) 「でもどうしてもあなたは僕に一言も—あなたの名前を書こうとはしないのですか?」
- (c) 「僕はあなたの目をみつめ、そして僕の目はおのずとあなたに物語る。僕がこの世で哀れな探求者だということを、僕の運命も他の人の運命も僕は何も分らないということを、僕が生きて、罪を犯して、創造してきたということを……。」
- (d) 「封筒に一言だけでも書いて郵便受けに入れて下さい。怒っていますか?」

(c)の文面を読んで想起するのは『肖像』第4章におけるスティーヴンの内的独白である。再度引用する。

To live, to err, to fall, to triumph, to recreate life out of life! (P p. 434)

生き、過ちを犯し、堕ち、勝利を得、生から生を創

造しなおそう！

続けて、ブルームの内的独白とそれに続くマーサの手紙全文を引用する。強調部分はジョイスの手紙との類似性を示している。

A flower. I think it's a. A yellow flower with flattened petals. *Not annoyed then?* What does she say?

Dear Henry

I got your last letter to me and thank you very much for it. I am sorry you did not like my last letter. Why did you enclose the stamps? I am awfully *angry* with you. I do wish I could punish you for that. I called you naughty boy because I do not like *that other world*. Please tell me what is the real meaning of *that word*? Are you not happy in your home you *poor* little naughty boy? I do wish I could do something for you. Please tell me what you think of *poor* me. I often think of the beautiful name you have. Dear Henry, when will we meet? I think of you so often you have no idea. I have never felt myself so much drawn to a man as you. I feel so bad about. Please *write me a long letter* and tell me more. Remember if you do not I will punish you. So now you know what I will do to you, you naughty boy, if you do not wrote. O how I long to meet you. Henry dear, do not deny my request before my patience are exhausted. Then I will tell you all. Goodbye now, naughty darling, I have such a bad headache. today. and write *by return* [Italics original] to your longing

Martha

P.S. Do tell me what kind perfume does your wife use. I want to know. (U 5. 239-58) [Italics mine]

花びら。きつと花だろう。これは。黄いろい花びらを押花にしたんだ。すると怒ってはないな。何と書いてよこしたんだろう？

ヘンリー様

あたくしに下さったこの前のお手紙を受取りました。ほんとうにありがとうございます。この間差し上

げたお手紙お気に召さなかったようね、ごめんなさい。なぜあなたは切手を同封したりなさったの？ あたしすっかりあなたに怒っちゃった。罰としてあなたをこらしめてあげたいくらい。あたし、あなたのことを、おいたさん、と呼ぶことにしたわ、だってあのもうひとつの世界はあたし厭なんですもの。あの言葉のほんとうの意味を教えていただきたいわ。あなたは家庭で幸せじゃないのかしら？ 可哀そうなおいたさん、あなたのために何かしてあげることができたらあたしほんとうに嬉しいんだけど。可哀そうなたたしのことどう思っているのか、教えてちょうだい。よくあなたの美しいお名前のことを教えます。ねえヘンリー、あたしたちはいつ会えますの？ いつもあなたのことを考えています、あなたには想像もつかないくらい。あなたに惹きつけられるみたいに男の人に惹きつけられたのは初めて。とっても辛いわ。長いお手紙を下さい、そしてもっといろいろなことを教えてちょうだい。もし下さらなかったら罰がひどいんだから、覚悟してね。これでもう分ったでしょう、おいたさん、手紙を下さらなかったらあたしがどんなことをするか。ああ、お会いできるときが待ち遠しいわ、ねえヘンリー、あたしが我慢しきれなくなっていくうちにきつとあたしのお願いを聞いてね。そしたらあたくしも何かもお話しするわ。ではさようなら、おいたさん。今日はひどく頭が痛いの、ですから折り返し御返事を下さいね。

待ちこがれている

マーサ

P・S あなたの奥さんがどういう香水をつけているか、教えて。知りたいのよ。

時間的順序から言えば、小説内のマーサの手紙部分を書いたあとに、ジョイスはマルテ宛の現実の手紙を書いた。つまり、小説のテキストが数ヶ月後作者の実生活上の手紙の文面に部分的に再生している。それは、『肖像』の場合も同様で、スティーヴンの魂の叫びが数年後、ジョイスのマルテ宛の手紙の文面に再生している。原文はフランス語だから、もちろん、翻訳された英語の表現がそのまま使われているわけではない。けれども、相手からの返信を、一言にしろ長い手紙にしろ、切望しているという意味内容と相手の気持ちを知りたいという内面心理の点で、類似性を認めることができる。

このように、ジョイスの実体験がマーサの手

紙に反映しているのではなく、その逆に小説内の架空のマーサがジョイスに影響を与えている。マーサの手紙は、ジョイス研究者が既に指摘している通り、サドマゾヒズム的幻想に支配された心理を表している。⁽¹⁴⁾そして、その心理は、サドの手紙を読んで、マゾ的願望を抱くブルームの心理と相通じている。さらに、マーサの心理はジョイスの心理をも反映しているとみることができるだろう。なぜなら、マーサは、マルテから部分的に造形された人物というよりもむしろ、作者の魂が吹き込まれた、作者心理の代弁者と考えられるからである。

雑誌発表時(1918年7月)の「食蓮人たち」のテキストと『ユリシーズ』出版時(1922年2月)のテキストの間には大幅な改訂があったけれども、マーサの手紙のテキストに関して言えば、両者のテキスト間にほとんど異同は見られない。ただし、花の名前とマーサの手紙の断片的語句が混交した次の一文は、改訂段階における加筆であり、時間的推移から考えて、マルテとの交際後、書き加えられた部分である。

Angry tulips with you darling manflower punish
your cactus if you don't please poor forgetme-
not how I long violets to dear roses when we
soon anemone meet all naughty nightstalk wife
Martha's perfume. (U 5. 264-66)

怒っちゃったチューリップあなたにいとしい男フラワー罰としてあなたのサボテンもし下さらなかったらきつと可哀そうな忘れな草たまらない^{すね}ねえあたしが^{ばら}薔薇いつまでもアネモネ会えます何もかもおいたさん夜の基奥さんマーサの香水。

この加筆自体の意図は、挿話の花のモチーフを最高度に凝縮して文体化する試みにある。花の名前混じりのこの一文は、マーサの欲望の発露というよりは、ブルームの潜在的な性的欲望の発露と考えられる。マーサの手紙に欲情をそそられたブルームは、彼女の手紙を自分に都合がいいように恣意的に解釈して、性的妄想に耽っているのである。「ナウシカア」で、ブルームはマーサの手紙を性対象としてオナニズムに

走らなかった幸運を喜ぶ。「よかったよ、まったく、今朝、風呂のなかでマーサのあなたをこらしめてあげたいなんて馬鹿な手紙でやらなくて。」(“Damned glad I didn't do it in the bath this morning over her silly I will punish you letter.”) (U 13. 786-87)

ブルームはフェティシストである。しかしながら、正確には、ブルームの性対象は女性の体の一部や衣服にあるのではなく、空想世界にある。ブルームにとって性対象は幻想的なものにすぎない。「キルケー」の幻想世界で本名を名乗る「ペギー・グリフィン」(“Peggy Griffin”) (U 15. 766-67)なるマーサ、彼女の手紙が喚起する想像の世界がブルームの性的衝動のはけ口となっている。その手紙によって創出された空想世界は欲情を満たすための代替世界として機能している。空想世界が理性を凌駕してしまうと、その世界を表出する言説は日常言語の範疇を逸脱する。理性を超越した、言い表すことのできないブルームの空想世界を表出するために、ジョイスは花言葉に頼らざるを得なかった。ジョイスはブルームの語り得ぬ世界の言語表現を追求して、読者に直接花言葉を投げかけてよこしたのである。

テキスト

Joyce, James, *Ulysses*. Penguin Student's Edition, 1986.

——, *Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man in The Portable James Joyce*. Penguin Books, 1966.

邦訳は丸谷才一・永川玲二・高松雄一訳『ユリシーズ』(河出書房新社, 1964年), 高松雄一訳『ダブリンの市民』(福武文庫, 1987年), 丸谷才一訳『若い芸術家の肖像』(講談社文庫, 1979年)に依拠しています。ただし、少なからぬ箇所用語・表現の変更があります。ジョイスの書簡は拙訳。

註

- (1) Homer, *The Odyssey*, trans. Walter Shewring (Oxford: O.U.P., 1980), Book IX, p. 101. (邦訳, 呉茂一訳『オデュッセイア』(上)(岩波文庫, 1971年), 第9書94行, 261)

- 頁)。
- (2) Phillip F. Herring, "Lotuseaters" in Clive Hart and David Hayman, ed., *James Joyce's "Ulysses": Critical Essays* (Berkeley: University of California Press, 1974), pp. 87-88.
- (3) Letter to Harriet Shaw Weaver, 7 October 1921, *Letters of James Joyce* I, ed., Stuart Gilbert (New York: Viking Press, 1957), p. 172.
- (4) Robert Graves, *The Greek Myths*, Vol. 2 (Penguin Books, 1955), p. 354. (邦訳、高杉一郎訳『ギリシア神話』下巻(紀伊國屋書店, 1973年), 291頁)。
- (5) 激痛を軽減するために、常用していたアヘンがやがて快楽的な興奮状態をもたらすようになった経緯をつぶさに書いた告白の書に、ド・クウィンシーの『阿片吸引者の告白』(*Confessions of an English Opium-Eater*, 1822) がある。
- (6) Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's "Ulysses"* (London: Abacus, 1982), p. 91.
- (7) Richard Ellmann, *James Joyce*, rev. ed. (Oxford: O.U.P., 1983), pp. 449-50. ジョイスの書簡集、他の研究書には"Martha"「マルタ」と表記されている。このジョイス伝にマルテ・フライシュマンと"her guardian" ルドルフ・ヒルトポルドの写真が一葉載っている(Plate XXX)。高級ドレスに身を包んだマルテは、ハイヒールを履いているせい、ヒルトポルドより長身で、どこかしらコケティッシュなところがある。彼女の若々しい肢体は、そのじつと正面をみつめるあどけない目と共に、見る人の心を捕らえて放さない妖しい香気を放っている。
- (8) Ellmann, p. 451.
- (9) Ellmann, p. 451.
- (10) Letter to Frank Budgen, 19 June 1919, *Selected Letters of James Joyce*, ed. Richard Ellmann (London: Faber and Faber, 1975), p. 239.
- (11) Ellmann, *James Joyce*, p. 442.
- (12) Ellmann, p. 442.
- (13) Letters to Martha Fleischmann, December 1918. *Selected Letters of J.J.*, pp. 234-35.
- (14) Suzette A. Henke, *Joyce's Marvellous Sideshow: A Study of "Ulysses"* (Columbus: Ohio State University Press, 1978), p. 88.